

---

# 輝く未来

Tomiono

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輝く未来

### 【Nコード】

N6557E

### 【作者名】

Tomionno

### 【あらすじ】

事情が事情で、実家の八百屋を手伝っている孝弘。未来には不安だらけだが……。ある女性が帰郷し、孝弘に出会うことで孝弘は大きく変わってゆく！

## （前書き）

なんつーか、これもまた友達に出し合った小説の課題の一つです。作成期間はおよそ二日。まあ、二日で書いたにしてはまあそれなりの出来ですが、ちょっと変な点もあります。あまり気にせず気楽に読んでください。

「トウルルルルル・・・」

電話は、四、五回鳴って止まった。部屋に突然、大柄の若者が入ってきた。

「あーちくしょう！また切れやがった！」

男は急いでかけなおした。

しばらくして、受話器の向こうで、陽気な声が響いた。

「あー、孝弘か！何で今つながってなかったんだ？」

「いや、ちよっとお客様の世間話に巻き込まれて・・・」

「なんだ？ そっちはずいぶんと楽しそうだな。こっちではもうそろそろ教授に論文を提出しなきゃいけないから大変なんだぞ」

「そういうなよ。俺だって好きでこんなことをやってるわけじゃないんだから。不況の所為で倒産しなかったら、今頃俺は卒業と共に会社でバリバリ働いているんだからよ」

「確かにあの倒産は孝弘にとっちゃショックだったかな。それで、

何だっけ？ そのショックで仕事も探さず今は実家の八百屋の手伝い？・・・ププツ」

「ああ！？ 一輝、今お前俺のことを笑ったか？」

「笑ってない、笑ってない」

「・・・あ、誰か買い物に来た！ ちよっとまた後でな、カズ！」

孝弘は電話を切って、店の外に出る。そして、そこにいる人を見て少し止まる。店で野菜を見ていたのは、とてつもない美人だ。白いワンピースの上に黄色いカーディガンを着ていて、その美しさに村本の声は裏返った。

「お・・・お客様、何か・・・お・・・お求めでし・・・しょうか・・・」

孝弘は喋ったあとすぐに自分の声に恥ずかしくなった。

その綺麗な女性は、自分の目の前に立っている大柄のエプロン姿の青年の、体に合わなく高く裏返った声に驚き、手を口に当てて綺麗な声で笑った。

「じゃあ、この茄子とほうれん草を・・・・・・・・あと・・・・・・・・」  
と、その女性は言った。

ずっと女性に視線を向け、見とれていた孝弘はようやく言う。

「はい、ほ・・・・・・・・ほうれん草ですね！　あと茄子！　今の季節の茄子は美味しいですよ！　これなんか・・・・・・・・ほら、凄く美味しいですよ！」

そして、野菜を沢山買った女性は、そのまま歩いて帰る。孝弘の視線はずっと後姿に釘付けで、しばらくそのままであった。三月の初めの頃であった。

「今日、何だかすごい美人が買い物に来たぞ！」

と、孝弘は夕飯の時、沢山御飯をほおばりながら言った。

孝弘の母は孝弘を見て言う。

「あんたがそんなことを言うなんて珍しいね。それは・・・・・・・・あのー、お父さん、誰だっけ、あのこの前里帰りしてきた子の名前は・・・・・・・・」

「神田・・・・・・・・とかなんとかじゃなかったかなあ」

と、孝弘の父はちよつと考えてから言う。

「お父さん、それをいうなら神崎だよ！　確か、神崎愛ちゃん！

あそこの神崎のお宅に帰省してるんだよ。東京大学の医学部を卒業して看護婦なんだっけ？」

と、孝弘の母は言う。

孝弘は御飯をのどに詰まらせる。

「げっ！東京大学の医学部！？」

孝弘のお母さんは言う。

「そりゃ、頭良い子なのはあの美人から見れば分かるでしょ！」

「いや、お母さん・・・・・・・・それはちよつと違うんじゃない・・・・・・・・」

・  
」

孝弘は笑いながら言う。

「分かるのよ、美人は頭良いって！ 私もそうだったからね。ね、お父さん！」

と、孝弘のお母さんはお父さんに向かって喋った。

「ん……どうだったかなあ」

と、孝弘のお父さんは答えに困って言う。

夕飯が終わると、孝弘は一輝に電話で神崎さんのことを伝えたが、一輝はつまらなそうにしていたので孝弘は電話を切った。

それから一週間ほどが経つ。

「んで？その神崎なんとかさんとは仲良くなれたのか？」  
と、一輝は電話越しに聞いた。

孝弘は言う。

「いや、わからないんだ、それが。毎日野菜を買いに来てくれるんだが……」

「それで、その度に話せるのか？」

「まあ、それは普通そんな美人がいたら世間話の一つや二つはするだよ」

「……一応、脈はあるんじゃないか？少なくとも、嫌われではないぞ」

「なんでだ？」

「そりゃ、毎日買いに来てくれてるし、その度ちゃんと話してくれるんだったら、少なくとも嫌われてはないよな。孝弘もそれくらい見抜けよ」

「何？ 一輝、お前俺にそんな言外のことを見抜けと？」

「あ……いや、なんでもない。孝弘には無理だろうな。鈍いから」

「なんだと！ お前だって……鋭いじゃねえか！」

「褒めてどうするんだよ」

「あーもうわかんねえくしょう！ 切るぞ！」

次の日、離している間、少しだけ神崎さんの頬が赤らんだように見えたが、孝弘はそれはその日が春にしては暑いからだと思った。実際、孝弘自信は汗だくだったのである。

そして、一日の終わりに、売れなかった野菜を孝弘は母に見せた。

「今日も売れなかった野菜がこんなにあったよ」

「まあ、明日にでも売れるといいけどね」

と、孝弘の母は言った。

「でも、あのかぼちゃなんか店晒しなんじゃないの？ もうとっくにかぼちゃの季節なんか過ぎてるぜ……」

母は、孝弘の方を見て、鼻で笑った。

「孝弘、あんだがせいぜい店晒しにならないようにしな。あの神崎さんなんかいいんじゃない？ 今度プロポーズしてみれば？ 案外オッケーしてくれるかもよ、あんたはウドの大木だけど気が効くからね。男は顔じゃないよ！」

孝弘はこういう意地悪なときの自分の母が嫌いだった。

その次の日、神崎さんがいつものように買い物をしにきて、野菜を選びながら楽しく孝弘と喋っていると、店に背が高い、ひよろつとした金髪の美男が入ってきた。その男は春なのに黒いコートを着ていた。その男は神崎さんと話し始めた。

「探したよ、愛ちゃん……なんでこんな所にいるんだ？」

「白石さん……あなたこそ何でここに？」

「探したんだよ……今日こそ、僕のプロポーズの返事、聞かせてもらおうよ」

孝弘はこのとき、「なぬっ！ 神崎さんを愛ちゃんだと？ 何だこいつ！ 殴ってやりてえ！」と思っていたが、やめた。

「言ってるでしょ、あなたは友達以上には思えないの……」  
「なぜなんだ、教えてくれ、愛ちゃん、僕の何処がいけないんだ？」

「それはあなたは天才的な医者で、若くして院長で、おまけにハンサムだけど、でも……」

孝弘は並べ立てられる良い点についてただ「すげーなー」と思うほか無かった。

白石という男は強く言う。

「僕の未来に不安があるんだったら、全部取り除いて、きっと君を幸せにしてみせる！」

孝弘は、自分の未来は不安だらけだと思った。

「お願いだ！ 教えてくれ！」

ここで孝弘が割って入った。

「ちよつと、その……ハンサムな方。喋りたくないって言ってるんじゃないから、それでいいんじゃないですか？」

白石は言う。

「君に何の関係があるんだ！」

神崎さんは、孝弘の方をチラッと見た。孝弘はどきつとなった。

「私……実は好きな人がいるの……」

と、神崎さんはやつと言った。

白石はうつむいて黙り込む。

孝弘は、

「まさか、俺！？」と考えているのであった。

白石は顔を上げて言った。

「じゃあ、それが誰なのか言ってくれ。正々堂々と勝負して君を手に入れたい」

孝弘は、

「こいつどこまでカッコいいんだ……」と考えていた。

そのとき、神崎さんはゆっくりと指を上げ、孝弘を指し、

「この人」と言った。

孝弘は思った。「ギャーツ！」

白石は孝弘の腕を掴んで、店の裏にある河原の土手に連れて行った。そして、成り行きでそこでの殴り合いとなった。白石は長身もあつ

て、外見に似合わない力で大学ではラグビー部だった孝弘と互角の闘いをしていた。

神崎さんは言葉を出すことも出来ずに、いつ喋ればいいのかも、どっちを応援してももう一人に悪いだろうと思いつながら、ハラハラしながら見ていた。

しかし、やつとのことで孝弘は白石をまともに一発殴り、その代わり同時に白石に腹を凄いい力で蹴られた。

二人は河原の土手に横たわり、お互いに引き分けたと認識し、起き上がって握手をした。かくして二人は友達になったのである。神崎さんはどうすればいいのか迷っていた。

白石は、清しい顔をして、孝弘の手をもう一度握った。

「今回は引き分けてしまったけど、いつか愛ちゃんを勝ち取って見せるよ」

そのとき、別の女性が二人の前に出てきた。その女性はショートな黒髪が似合う、中背中肉の美人だった。

「真一！ この女たらし！ 何が『愛ちゃんを勝ち取って見せる』よ！ 許婚のあたしは放ったままかい！」

「うわっ、由香！ 何でここに！」

「ゴメンね、愛ちゃん。真一はどうしようもなくて……真一い！ 今日という今日は許さないわよ！」

そういい、由香という人は白石に向かって飛び掛ったが、白石もそこに突っ立っているはずもなく、走り出した。

土手を走る二人を見ながら、孝弘は神崎さんに話しかけた。

「いや……あ……あの、さ、さっきのが嘘でも構わないんですが……今度僕とお……お……お……お食事でもど……どうですか……？」

神崎さんは驚いたような顔をして、喜んでと返事をした。

孝弘は空に向かって叫んだ。

「やったぜーっ！」

孝弘は、また職を探るか、大学に戻るかする気力が湧いてきた。そ

のとき、自分の前に果てしなく広がる未来が見えた。そして、その未来が輝くのも。

（後書き）

今回の課題は「恋愛小説」！ ということ、僕はちよつとまとめたんですね。辞書からひいた、入れなければならぬキーワードも店晒し、未来、そして言外でしたからね。まあ、注意点、アドバース、駄目出しなどがあつたら気軽に言ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6557e/>

---

輝く未来

2011年1月27日00時48分発行